

日本曆学史文献案内

内田 正 男*

はじめに

本文は曆学史に関心を持たれる方のために、有用と考える文献を案内するのが目的である。

1973年、明治改暦100年記念と銘うって、新人物往来社が月刊誌『歴史読本』の臨時増刊『万有曆百科』なる雑誌を出版した。13万部を刷ってほぼ売り尽したと言われるから、この種のものとしては大成功の部類に入るのであろう。これに刺激されたようにこの頃から曆関係の専門書・啓蒙書が数多く出版された。主な専門書としては『天文方関係史料』『日本曆日原典』『日本の曆』『高橋景保の研究』『日食・月食宝典』などがあり、また『日本天文史料』『明治前日本天文学史』も複製された。それらを含めた明治以来の単行本については『日本の曆大図鑑』の中で“曆に関する参考文献”と題して解説付でまとめられていて大変便利である。この本はさきの『万有曆百科』と同じ出版社が、前回より図版を多くし保存用に編集したものである。

ところで単行本は上記目録にほぼ完全に採録されているが多くの雑誌や紀要のたぐいに発表される論文や紹介記事を渉猟する手がかりは乏しい。日本の曆学は中国とのつながりが強いので中国に関係した論文も多いが、それらに就いては京都大学人文科学研究所付属の東洋学文献センターより『東洋学文献類目』という大層立派な本が出版されているのでそれをひもとけばよい。

日本科学史学会編『科学史研究』（季刊・岩波書店）には年一回、前年の文献について“科学技術史関係年次文献目録”が編集されており、その天文学史および日本・東洋天文学の二つの項目の中に関係論文がある程度は集められている。また日本歴史学会編の『日本歴史』（月刊・吉川弘文館）には日本史関係雑誌論文目録が毎号巻末にあるから、僅かではあるがここからも必要論文名を拾うことができる。しかしこの二つの目録に丹念に目を通して関係論文の全部を拾うことは到底できないし、その欠落を補うことは一般的になかなか大変なことである。そのことは本文末の註記にある掲載誌の種類の多さからもわかるであろう。このほど私は浅学・管見をかえり見ず“日本曆学関係文献目録”と題して東京天文台報に文献リストを発表した。もとよりそれは万全を期したなどと大それたことを言うつもりのもではなく、

当初から補遺を覚悟のリストであるが、主要なものはほぼ集め得たのではないかと思っている。そこでは幾つかの項目に分類して論文名・筆者・掲載誌・発表年などを記してあるが、論文の軽重に就いては触れていない。そこでそれらの中から重要と思われるもの、興味深いものに付いて取上げてここに紹介したいと思う。

私の採録した天文曆学史関係の論文がもっとも多く掲載されていたのは天文月報（73）、蘭学資料研究会研究報告（41）で以下天文総報・科学史研究・日本天文研究会報文などであった。

1. 曆日関係

“出雲風土記はその奥書によって天平5年2月30日に勘定せられたと言われている。しかし長曆を按ずるに天平5年の2月は小月で30日が無かったのである。しからばこの日附は誤か偽としなくてはならぬ。”

これは藪田嘉一郎氏の「出雲風土記剝偽」¹⁾の書き始めである。現在の私らの考えからすると、このような言い方をされると誠に奇異の感にうたれる。出雲風土記に天平5年2月に30日とあれば2月は大の月であり、後世の人が作った長曆の方を訂正しなければならない、という考えが私などは直ぐに頭に浮かぶ。30年ほど前には歴史研究家の間にまだ長曆（日本長曆・三正綜覧など）信仰がかなり根強く残っていたのである。上記については後に益田勝美・岡田清子両氏の「出雲風土記成立の年代」²⁾によって正当に反論され、他の史料からもこの月は大と考えた方がよく『日本曆日原典』においても計算結果の小を大に訂正してある。

主として昭和の初期にすぐれた曆関係の論文を多く発表されている小川清彦氏にしても「看聞御記に見えた新月の観測と三正綜覧の一誤謬」³⁾のなかで“今まで私は三正綜覧は正しいものとうっかり思っていた”と言われているくらいであるから、当時曆日関係の基準書にされていた三正綜覧が当てにならないことが一般に衆知の事実になって来たのは比較的新しいことである。ちなみに私は最近調査した結果を「日本長曆から三正綜覧まで」⁴⁾に発表した。三正綜覧は月朔干支の誤りのみ（陰陽換算も多数の誤りがある）をとっても初版で44個、最新版（1973）でも27個あり、別に文献・史料との所徴不足（これは初版から不変）が73個あるので、日本曆日原典とくらべると初版で117、最新版でも実に100個の相違がある。

* 東京天文台・Masao Uchida: A Guide to the History of Calenders in Japan

私は「出土文書の年代と日付の問題」と題して本誌の72巻10月号に暦日問題の実例をあげたが、断片的に発見される古暦や古文書の日付を確定するための方法には幾つかの道があり、多くの方々がいろいろの例について論じておられる。かつて上田穰氏が推定の実際的方法に関して「具注暦断簡」⁹⁾を發表された。これに対し小川氏は「古暦管見」⁹⁾を以て、曜日を利用する上田氏の方法の迂遠をつくつと、上田氏はまた「古暦診断学」⁷⁾と題して小川氏に答え、小川氏はまた「古暦断見」⁹⁾によってこれに駁するという経緯があった。暦日判断の方法論の古典ともいふべきであろうか。小川氏には別に「宣明暦行用時代における推算と暦日」⁹⁾がある。暦日原典編纂の際には利用させて頂いた。

岡田芳朗氏は古い時代の古文書の日付を丹念に調べ長暦の朔干支、月の大小の正否について一つ一つ検証して「古文書による奈良時代暦日の復原」¹⁰⁾ほか類似の題名のいくつかの論文を發表しておられる。

桃裕行氏の「古記録零拾」¹¹⁾は氏一流の史料についての確かな博い目で綴られた暦日判定の実例集であり、是非おすすめしたい一つである。さらには広瀬秀雄氏の「具注暦の年号について」¹²⁾前山仁郎氏の「下段暦注による暦の年号決定について」¹³⁾、内田の「日本の暦日に関するいくつかの問題点」¹⁴⁾などが主なものであるか。

「日本書紀の暦日について」は小川氏の論文が著名である。私も同氏の論旨に賛成であり、その論文の公刊されないのを惜んで『日本書紀暦日原典』刊行の際、同論文の全文を巻末に掲載した。大谷光男氏は『古代の暦日』の中で、小川氏のものを含め日本書紀の暦日に関する幾つかの論をまとめ、論評されている。続日本紀の暦日に関するものと併せてさらに数多い論文があるが、本誌の読者に余り面白いものとも思えないのでここでは割愛する。

2. 頒 暦

実際に流布した頒暦の個々について、あるいは内容に関して書かれたものは多いが、総合的なものとしては京暦、三島暦を初めとする8つの頒暦の出所・由来を調査した阿部憲氏の「本朝八暦考」¹⁵⁾が古典的な力作と言えようか。西内雅氏の「伊勢暦の研究」¹⁶⁾もよく調べられているが、いつもながらの氏の固執主義的な考えが随所に散見されて気になるところである。

宣明暦時代の暦の内容に関しては桃裕行氏の独壇場の感が深い。宣明暦の時代には計算で4か月大の月が続くことがあると朔干支を変更して大小を入れかえ四大を避けることが行われた。しかしそのまま行われたこともあって不明な点も多かったが氏は「四大を避けること」¹⁷⁾

によって初めてその全ぼうを明らかにされた。また暦算の草稿は見行草(けんぎょうそう)と言われたが、「嘉元3年見行草について」¹⁸⁾は見行草にくわしく触れている唯一のものであろう。「大経師と三島暦」¹⁹⁾「京暦と三島暦との日の食違について」²⁰⁾、「神託で閏月をきめること」²¹⁾そのほかいくつもの、そのどの一つをとっても博引旁証、氏ならでは内容は私ごとき歴史の素人(本誌の読者も多くそうであろう)には勉強になることが多く一読をおすすめしたい。

頒暦の代表的なもの一つ、京都の大経師暦の版元で天和年間(1681~84)に起った大経師浜岡権之助の妻と手代の姦通事件は、西鶴の「好色五人女」の巻3「中段に見る暦屋物語」、近松の「大経師昔暦」を初め歌舞伎、浄瑠璃、小説などに取上げられ、近世を通じてもっとも多く文芸作品に扱われた事件である。これについて新資料に基づく実説を詳しく論じているのが諏訪春雄氏の「大経師昔暦の実説」²²⁾である。

趣味的な暦と言えば大小暦である。大小暦の単行本は長谷部言人氏『大小暦』(昭和18年)が唯一のものであるが、戦時中の出版で紙質も印刷も悪くまた入手も困難であるが、氏の御子息の長谷部満彦氏が「江中時代の略暦——大小について——」²³⁾としてまとめられたものが最も詳しい。ただしそこに掲載されている大小暦の写真は珍しいものが多いが残念ながら白黒である(カラーは一枚)。

3. 太陽暦に関連して

太陽暦の古いものと言えばキリシタン暦となる。現存する最古のキリシタン暦は文禄3年(1594)のもので、これは「パウロ人見(ひとみ)の切支丹暦」²⁴⁾(今井湊氏)と呼ばれる。宣教師によって布教が盛に行われていた時代は公然と暦を作ることもできたが、秀吉に始まる禁教の時代にも、信仰上の祝日を知るための暦はキリシタンによってひそかにそして切実に求められた。折しもグレゴリオ改暦(1582)直後の混乱もあった。その間の様子は太崎正次氏の「吉利支丹の暦」²⁵⁾、「日本耶穌会の改暦」²⁶⁾に詳しい。

安政5年(1858)の修好条約に基づいて居留外国人の信仰が認められ長崎にカソリックの寺院、いわゆる大浦天主堂が建設されると、ひそかに10余人の農民が訪れた。200余年の厳禁をしのいだかくれキリシタンは外国人を驚かせたが幕府はまだ厳禁を続けていて禁教は続いており、慶応3年には68人が捕えられ、拷問を受けている。彼等が解放されたのは明治6年である。この頃のものについて片岡弥吉氏「慶応4年の筆写本“きりしたんごよみ”について」²⁷⁾、岡田芳朗氏「明治元年のキリシタン暦」²⁸⁾がある。表題の年号は違っているがどちらも1868

年のもので全年の記載がある。内容には相違があるから元は別のものであろう。

比較的最近になっても太陽暦の改良案、世界暦などについてうんぬんするものもあるが、前山仁郎氏の「改暦問題の発展と近況」²⁹⁾を読めば世界暦がどう扱われたかもわかり、改暦などということが現時点でどのように実施不可能なことかよくわかるであろう。

旧暦と干支、太陽暦と曜日とは切り離せない。“大同より以前には曆家に蜜日を知るものなく、これゆえに日辰の吉凶雜乱して人の之を犯すもの多し”と弘法大師の伝記にあるとおり蜜字、すなわち七曜の一つである日曜日を日本に輸入したのは大同元年(806)に唐より帰朝した弘法大師である。大師伝に見られるように日曜の導入は宿曜教による日の吉凶判断に用いるのが目的であった。日曜(蜜または密, mir)のみが重んじられたためか、月曜(莫, Māq)以下が使われている例は余りないようである。19世紀の半ばころ中国の福建省の沿海地方でこの蜜を標記した民間暦が行われていて、西欧のアジア研究家たちはその意義の解釈に苦しんだという。藤原道長の日記(998~1021)にこの蜜字が記されていることは今ではよく知られているが、この意味を日本で最初に解明したのは羽田享博士であった(昭和6年)。

石田幹之助氏の「日曜に“蜜”字を標記した具法暦」³⁰⁾にはいま述べた蜜字解釈のことや、蜜字の記された具注暦の実例48個があげられている。そしてこれを補足しているのが太田晶二郎氏の「日本の暦に於ける“蜜標記の上限」³¹⁾である。

太陽暦に改暦して旧暦の日付と太陽暦のそれとを照合する必要が生じて政府の名において編纂されたのが『三正綜覧』であったが、それより早く和洋対暦表を作った外国人については余り知られていない。平林広人氏「デンマーク人プラムセンについて」³²⁾、洞富雄氏「プラムセンの“和洋対暦表”と“三正綜覧”」³³⁾などがある。

4. 天文方と天文台

……、金之丞と申す、御兄上は誠に立派な御風采のお方であらせられた。色白く、でっぷりとよく肉付の背も高く、今見立(いまみたて)で言うなら(失礼の言、ごめん下され)片岡仁左衛門の由良之助と申さうかと思ふ。めかし道具といふ箱があり、朝お目覚めに成られると御洗面後種々おみがきに成る。実におきれいでありし。……

この金之丞とは山路家最後の天文方である金之丞彰常である。引用した一節は金之丞の弟、鉞四郎(えつしろ)と養子縁組した久間孝子女史(1933年92才でなくなられた)の覚え書きで、下沢剛・広瀬秀雄両氏が「幕末天文方の生活——久間孝子覚え書——」³⁴⁾として紹介

されている。直接天文暦学にかかわりはないが当時の天文方の仕事・給与・屋敷のありさま、人との交際など暮らし向きのことが女性らしいこまやかさで画かれている一方、息子の一郎が金之丞の反対を押切って彰義隊に加わった始末など小説以上の面白さがある。お暇の折は是非御一読を、と言いたい。

初の天文方に任命された渋川春海のことはその没後250年を期して記念事業が企画され本誌でも特集(1965年9月号)を行っている。

大谷亮吉氏「旧幕時代の天文台の位置」³⁵⁾は随分昔のものであるがその価値は失われていない。久間孝子覚え書にもでてくる幕府最後の天文台の細かい模様は下沢剛氏「浅草鳥越の天文屋敷」³⁶⁾に見ることができる。

5. 暦法

日本暦学史関係の研究をしているのは大別すれば天文学関係者と日本歴史の側からのものとなる。一般的には(もちろん例外はあっても)天文やさんは歴史に浅く、歴史やさんは数字に弱い。したがって数字を扱わざるを得ない暦法の研究は天文の側の人にはほぼ限られる。

日本の古くに用いられた暦法の計算についての詳しいことは藪内清氏の著書『隋唐暦法史の研究』に見られ、計算例については『日本暦日原典』の暦法編に説明がある。今井溱氏は暦日原典以前に天官書³⁷⁾のなかで「唐暦の補間法」「唐代暦の気朔計算」など手計算で行った暦計算の方法と数値を示す労作を発表しておられる。

江戸時代の暦家・和算家にとってもっとも関心を持たれて研究されたのは授時暦である。平山清次氏の「授時暦の研究大要」という講義の要旨は『明治前日本天文学史』のなかに挿入されている。授時暦に採用されている勾配術(補間法)、招差術(等差級数)などは西内雅氏『渋川春海の研究』の附録の「授時暦の研究」に説明がある。今井溱氏は天官書の中の「授時暦研究」において主として授時暦に用いられている三角法(らしきもの)と球面三角法による数値の比較検討を行い、かつ太陽運動について回々暦との比較を論じられている。和算は自然科学より刺激を受けることなく、もっぱら趣味的・芸術的に発達したという従来の定説に対して、暦学上の問題から和算が大いに影響された事例があるとして議論を展開しているのが広瀬秀雄氏の「授時暦の研究」³⁸⁾である。

和算の方では問題や解答を神社に掲額することが多く行われたが、珍しいものとして「赤穂大津の暦法算額」³⁹⁾(桑原秀夫氏)があり、この数値を解析した広瀬秀雄氏の「授時暦と大津神社算額」⁴⁰⁾がある。

悪名高い宝暦暦はその改暦の経緯からして多くの問題を内包しているが広瀬秀雄氏の「宝暦の改暦につい

て⁴¹⁾・「宝暦改暦後の編暦問題の推移と寛政改暦をめぐる問題点」⁴²⁾の二つは併せ読むべきものであろう。暦法の内容の粗雑については渡辺敏夫氏の「貞享補暦と宝暦改暦」⁴³⁾によって推察される。

おわりに

新田義貞が稲村ヶ崎で劔を投げ、そのおかげで？潮の引いた浜づたいに進入して鎌倉攻略に成功した話は有名であるが、そのときの潮の具合はどうであったのかと、checkしたくなる人がときたまあるらしく、2, 3回人からその計算に関して尋ねられたことがある。これについては計算が非常に得意であった小川清彦氏が、60年以上も前にちゃんと計算してある。「大平記“稲村ヶ崎長干のこと”の話」⁴⁴⁾というのがそれである。

どの分野の学問でも先学がどのようなことを研究発表しておられるかを知ることには大変だいなことで、知っていることによって無駄な計算をしなくてもすむ場合もある。その点天文暦学の分野は論文の数もすくなく知れる限り集めて読むことも可能である。紙数の関係もあってここには私のリストに採録した一部しか紹介できず、また天文史料関係、昔の文献に関するもの、星図・星宿・天球儀など、あるいは時刻制・総論的な分類に入れたものには全然触れなかった。ここに紹介しなかった論文の筆者ならびに読者の御諒解を願う次第である。

(本文に関する御質問は往復はがきで東京天文台・内田正男宛にお寄せ下さい)

19) 古事類苑月報, No. 37, 1970
 20) 天文総報, 14, 4, 1960
 21) 日本歴史, No. 163, 1961
 22) 近世文芸, No. 22, 1974
 23) 三浦古文化, No. 22, 1977
 24) 日本天文研究会報文, 2, 2, 1959
 25) 史学雑誌, 49, 12, 1938
 26) 歴史地理, 70, 10, 1937
 27) キリシタン文化研究会報, 13, 3, 1970
 28) 日本史攷究, No. 17, 1971
 29) 天文と気象, 1月号, 1957
 30) 国学院雑誌, 53, 2, 1952
 31) 日本歴史, No. 72, 1954
 32) 学燈, 61, 4, 1965
 33) 日本歴史, No. 199, 1964
 34) 科学史研究, No. 103, 1972
 35) 天文月報, 9, 11, 1917
 36) 史迹と美術, 41, 9, 1971
 37) 自家孔版, 1~26, 1953? ~ 58
 38) 東京天文台報, 14, 4, 15, 2, 1969 ~ 70
 39) 美しい幾何図形シリーズ, 33, 1979
 40) 数学史研究, 82, 1979
 41) 蘭学資料研究会報告, 127, 1963
 42) " , 157, 1964
 43) 日本天文研究会報文, 6, 1, 1974
 44) 天文月報, 8, 1, 1915

註

掲載誌	巻, 号	発表年
1) 日本歴史,	No. 22,	1950
2) " ,	No. 47,	1952
3) 天文月報,	24, 4,	1931
4) 東京天文台報,	18, 4,	1979
5) 科学史研究,	No. 3,	1942
6) 天文月報,	36, 2 ~ 4,	1943
7) " ,	36, 11,	"
8) " ,	36, 12,	"
9) " ,	35, 7, 8,	1942
10) 日本史攷究,	No. 13, 14,	1969
11) 高橋隆三先生喜寿記念論集,		1970
12) 土 ,	No. 87,	1967
13) 金沢文庫研究,	12, 2,	1966
14) 東京天文台報,	18, 1,	1977
15) 史学雑誌,	13, 1, 2,	1902
16) 皇学館大学紀要,		1963
17) 歴史地理,	91, 3,	1966
18) 史料編纂所報,	No. 1,	1966

お知らせ

第11回碁星会議

日時: 1981年3月28日(土)~29日(日)
 会場: 福岡市中央区桜坂3丁目13番14号
 「望洋荘」

くわしくは

〒810 福岡市中央区梅光園団地 4-412
 長田有司まで

☆ ☆ ☆